

ぶんごたかだ 文化財ライブラリー vol.3

豊後高田の 古墳



豊後高田市教育委員会

はじめに ～古代ロマンあふれる“古墳”～

■古墳と古墳時代

古墳とは、3世紀後半（約1750年前）～7世紀（約1400年前）にかけて築造された、土を高く盛り上げた墳丘を持つ墓を指します。この時代を「古墳時代」と呼び、古墳がもっとも大型化する中期を中心にして、前期（3世紀後半～4世紀後半）、中期（4世紀後半～5世紀末）、後期（6～7世紀）に区分します。当時の水稻農耕社会を基盤として、大王や各地の豪族、時代が下ると有力農民層に至るまで、多くの権力者が古墳を築いています。その分布は、南九州から東北地方にまで及んでいます。



仁徳天皇陵古墳(大阪府堺市)
百舌鳥古墳群に所在する日本最大の巨大前方後円墳。2019年(令和元)に世界遺産登録された「百舌鳥・古市古墳群－古代日本の墳墓群－」の構成資産の一つ。

[画像提供:堺市文化観光局]

■古墳の数と形と大きさ

日本全国で確認されている古墳の数は約16万基にもものぼります。全国のコンビニエンスストアの店舗総数が約5万5000店（2020年10月現在）ですから、古墳はその約3倍にもなります。大きさでは、墳丘長486mを誇る仁徳天皇陵古墳（大仙古墳）もあれば、10m前後の小規模なものまであります。また、古墳にはさまざまな形があり、この種類の多さは、日本の古墳文化の大きな特色の一つと言えます。そして、古墳の形にも地域差や流行がみられます。

○円墳 例) ^{いかずち}雷鬼の岩屋古墳



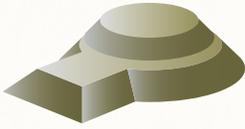
平面が円形の古墳。古墳時代を通じて数多く造られました。直径数m～100m前後で、規模は中・小型のものが多いです。

○方墳 例) 西田古墳



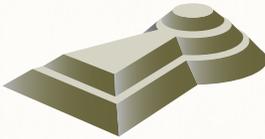
平面が方形の古墳。円墳に次いで古墳時代全般を通じて造られました。7世紀には大型の横穴式石室をもつ巨石墳もみられます。

○帆立貝形古墳 例) 入津原丸山古墳



円丘に小さな方形の壇(=造出)を設けた古墳。平面形がホタテ貝に似ていることから名付けられました。円墳の一種とみるか、前方後円墳の一変形とみるかは判断が難しいところです。

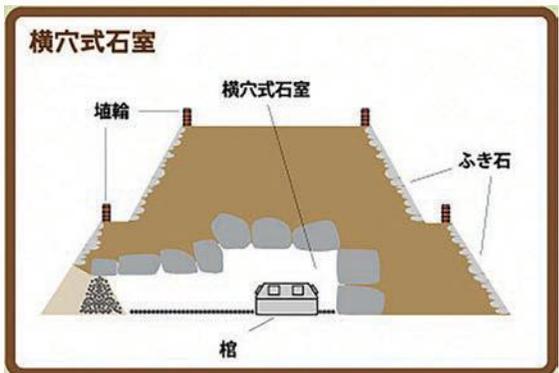
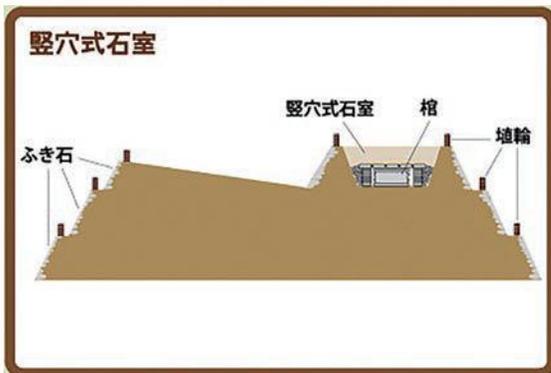
○前方後円墳 例) 真玉大塚古墳・猫石丸山古墳・野内古墳



円丘に方丘を連結したような形で、上から見ると「鍵穴形」をしています。日本独自の墳形として3世紀後半～6世紀にかけて各地に造られました。その数は全国に約5000基。奈良盆地に出現し、中期には畿内地方に大規模な前方後円墳が多く分布することから、ヤマト政権を核とした全国統治の政治秩序が形成されていったことを示しています。

■古墳の内部はどうなっている？

古墳の内部には亡くなった人を埋葬するための部屋(石室)が設けられています。古墳時代前期～中期には、墳丘の上から穴を掘って棺を安置した後に、周囲に石を積んで壁とし、更に大きな石で蓋をして埋める竪穴式石室が盛行しました。古墳時代後期には朝鮮半島からの影響を受けて、墳丘の横に入口(羨門)をつくり、通路(羨道)の先に棺を安置する空間(玄室)が広がる横穴式石室が一般的となりました。横穴式石室は入口の石(閉塞石)を取り外せば追葬が可能で、数世代にわたって使用することが出来ました。

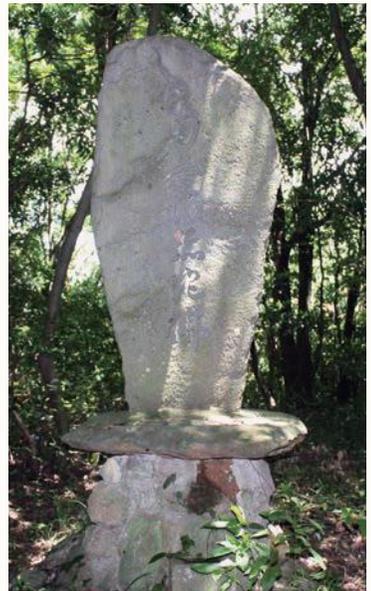


古墳の埋葬施設(竪穴式石室と横穴式石室)の模式図

[図版提供: 百舌鳥・古市古墳群世界遺産保存活用会議]

棺の形や材質もさまざまで、木や石をくりぬいたり組み合わせたりしたものや、奈良県や岡山県などの一部地域では陶棺とうかんと呼ばれる焼き物の棺も用いられました。

また、古墳には亡くなった人と一緒に日用品や装飾品などが棺や石室の中に納められていました。銅鏡やまがたま 勾玉・くだたま 管玉、ふくそうひん 武具・馬具などの副葬品からは、ひそうしゃ 被葬者の性格や権力の強さを読み取る事が出来ます。



入津原丸山古墳 石碑
墳丘上に所在する石碑には、石棺(箱式石棺)の部材が転用されている。

■ぶんどたかだの古墳

豊後高田市には現在、確認されている限りで66カ所もの古墳が所在し、とりわけ、しんえい 新栄～くさじ 草地～にしま 西真玉地区たまにかけてまとまって分布しています。当時の海岸線に沿った大変目立つ場所に古墳が造られていたことが分かります。ここでは、古墳時代中期前半～後期前半にかけて入津原丸山古墳、真玉大塚古墳、野内古墳、猫石丸山古墳と比較的大きな古墳が継続して造営されており、この地がにしくにさき 西国東地域を統率する歴代の首長の墓域であったと思われれます。中でも、入津原丸山古墳(77m)及び真玉大塚古墳(100m)の規模は突出しており、両古墳からは西国東をはるかに上回る広い領域を組織した盟主的首長の存在を感じさせます。

また、みわ 美和地区やたしぶ 田染地区の一部では、斜面の岩盤に横穴を開けて墓室とした「よこ 横穴墓」と呼ばれる家族墓がみられるほか、立派な横穴式石室が残る雷鬼の岩屋古墳など、市内ではさまざまな特徴の古墳を各所で見る事ができます。

今回、市内に所在する主な古墳を取り上げて解説した小冊子『豊後高田の古墳～ぶんどたかだ文化財ライブラリー Vol.3～』を作成しました。古墳見学の手引きとして、また、豊後高田市の歴史文化を知る一助としてご活用頂ければ幸いです。

にゅう づ ばる まる やま 入津原丸山古墳

・文化財指定
[県史跡]

・位置情報
【33°34'32.4"N 131°26'56.7"E】

入津原丸山古墳は広瀬川南岸の段丘の突端部に位置しています。円丘部の径は約70m、高さ約10m。これに、祭祀を行う場とされる大型の「造出」(長さ約7m、幅約23m)を伴った長径約77mの帆立貝形古墳です。円丘部は三段築成、周囲に濠を巡らします。右上の写真のように、古墳の形に沿って幅広い濠の形が水田となって残っていることが分かります。

埋葬施設は安山岩製の箱式石棺で、墳丘上にある石碑(3頁写真参照)に部材の一部が転用されています。

1901年(明治34)に発掘調査が行われており、鏡・革綴

短甲・玉類・滑石製品などの副葬品が発見されています。出土品は現在、東京国立博物館が所蔵しています。

また、円筒埴輪・朝顔形埴輪などが現地で採集されています。その中には、方形もしくは三角透かしとみられるものがあり、これらの特徴から、入津原丸山古墳は4世紀末～5世紀初頭(古墳時代中期前半)の築造と推定されます。

入津原丸山古墳の登場は、近隣に所在する古墳の形や規模等と比較すると、西国東の地に初めて広域的な盟主権が移行してきたことを物語っています。



入津原丸山古墳周辺空中写真



入津原丸山古墳遠景(北側より望む)

銅鏡 (伝 鑑堂古墳出土)

かがみどう

・文化財指定
[県有形]

・位置情報
【33°34'45.0"N 131°27'20.4"E】

草地の黒松区には、かつて鑑堂古墳（鏡塚とも）という径20mほどの円墳があったとされます。しかし古墳は早くに消滅しているため、詳細は不明です。江戸時代末期の発掘によって出土した銅鏡一面が地元に残っており、大分県指定有形文化財として現在に至っています。

銅鏡は「しんじんしゃ ばりゅう こ が ぞうきょう神人車馬龍虎画像鏡」という中国の後漢末～三国時代の鏡で、直径20.9cm。優れた鏡背文様の意

匠と、遺存状態の良好さが高く評価されています。ちゅう じゅもん紐の周囲に珠文を配し、内区は4つのにゅう乳によって四分割され、しんじん神人（中国の神仙思想に登場する神、とうおうふ せい東王父と西めい王母が描かれているとされる）、馬車、龍、虎の図像を持ちます。内区に接した銘ぶんたい文帯には「劉氏作竟四夷服 多賀国家人民息 胡虜殄威天下復 雨風時節五穀熟 長保二親得天力 大吉利兮」の39字が陽刻されています。外区にはくしば櫛齒文、きょし鋸齒文、うんき雲氣文と続いて縁となります。

これほどの銅鏡がヤマト政権から下賜されたものとするれば、鑑堂古墳の被葬者は小さな古墳の規模に比べて大変強い力を持っていたと思われる。



銅鏡(神人車馬龍虎画像鏡) 通称:「黒松銅鏡」

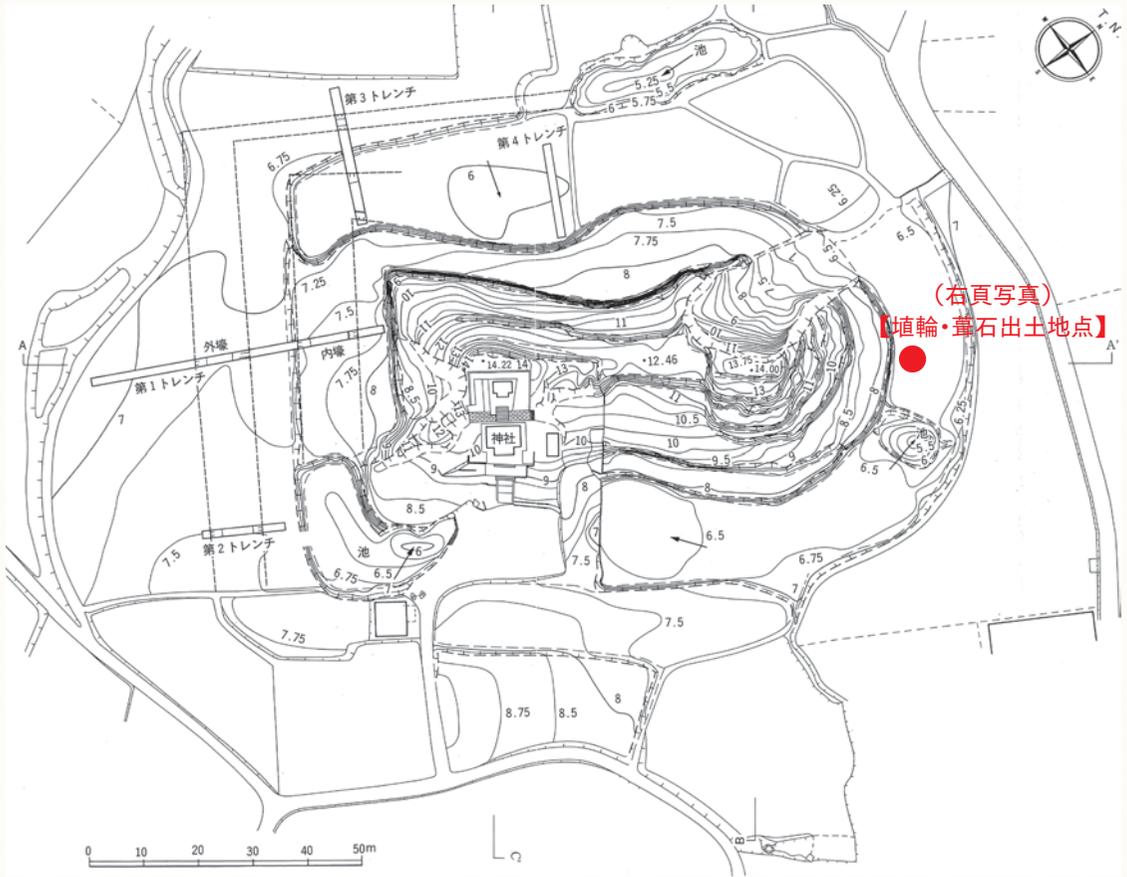


銅鏡(外区)の部分名称

ま たま おお つか
真玉大塚古墳

・文化財指定
[市史跡]

・位置情報
【33°36'09.0"N 131°27'43.5"E】



真玉大塚古墳墳丘測量図

大分県教育委員会(1998)『大分の前方後円墳』より

西真玉に所在する真玉大塚古墳は、真玉川と赤坂川によって隔てられた周防灘を眼前に見渡す段丘の先端部に立地しています。現在は干拓によって海岸線が後退していますが、築造当時は段丘の突端まで海が迫っていたと考えられ、海からの眺望を強く意識した古墳であったことがうかがえます。

真玉大塚古墳は古くから知られた前方後円墳でしたが、1995年（平成7）～97年（平成9）にかけて旧真玉町によって古墳規模を確認する調査が行われました。その結果、墳長は約100mで、墳丘の周囲に二重の盾状の周濠が廻っていることが分かりました。外濠まで含めると全長135mの規模となり、大分県下でも屈指の規模の前方後円墳といえます。墳丘は神社の造営や、土取りなどによって大きく損

壊していますが、前方部・後円部ともに三段築成とみられます。また、原地形は平坦な段丘面であることから、墳丘の大部分は盛土であったと推定されます。周濠のような低くする部分の土を取り、高くする部分に盛り、足りない土は離れた場所から運んできたと思われます。発掘調査では下の写真のように、濠跡付近から大量の埴輪^{はにわ}のかけらや、古墳の表面を覆っていたとされる葺石^{ふきいし}が発見されました。おそらく、築造当時は古墳の周りに整然と埴輪が立ち並び、墳丘全面に敷き詰められた葺石が陽光に反射して、白く輝いていたことでしょう。

墳丘形態と埴輪から真玉大塚古墳は、古墳時代中期後半（5世紀中頃）の築造と考えられ、その被葬者は眼前の海上交通を把握し、瀬戸内海を通じて畿内との交流を担っていた強大な盟主的首長の存在を感じさせます。



平成9年度発掘調査による埴輪・葺石の出土状況

■^{たんのわ}円筒埴輪について ～淡輪系埴輪とは？～

埴輪は古墳時代全般を通して見られる土製品です。愛らしい造形の人物や動物の埴輪（形象埴輪）が広く親しまれていますが、最も多く作られたのは土管のような形の円筒埴輪です。もとは弥生時代に吉備地方（現在の岡山県・広島県東部）の支配者の墓で用いられた特殊器台・特殊壺が、円筒埴輪の起源とされています。円筒埴輪は聖域を区画する役割があったとされ、墳丘を囲むように立てられました。また、埴輪の形式や製作技法の変化に注目することで、古墳の築造年代を推定することも出来ます。真玉大塚古墳から出土した円筒埴輪の大多数には、底部にくぼんだ「段」がありました。この特徴は「淡輪系埴輪」という、大阪府南部から和歌山県にみられる埴輪の形式で、九州での発見例は稀^{まれ}です。真玉大塚古墳の被葬者が、畿内地方と密接な関係を有していたことを示す資料です。

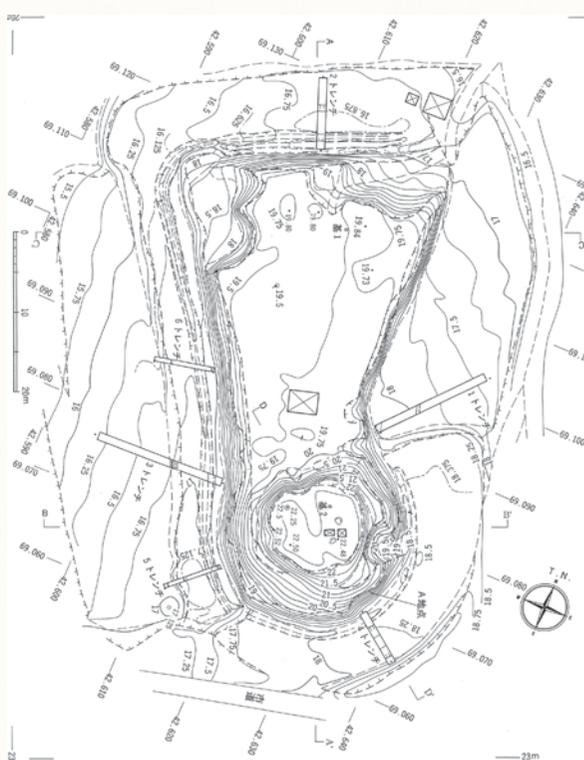


真玉大塚古墳出土
円筒埴輪



猫石丸山古墳空中写真

平成8年度調査当時。現在の墳丘は樹木に覆われている。



猫石丸山古墳墳丘測量図

大分県教育委員会(1998)『大分の前方後円墳』より

猫石丸山古墳は、周防灘に面した赤坂川左岸の丘陵先端部に立地しています。ため池（小谷池）のある谷の西側の最も高い位置に、丘陵尾根を背にして築造されています。また、周辺には横穴式石室墳である花仕切古墳群が所在しています。

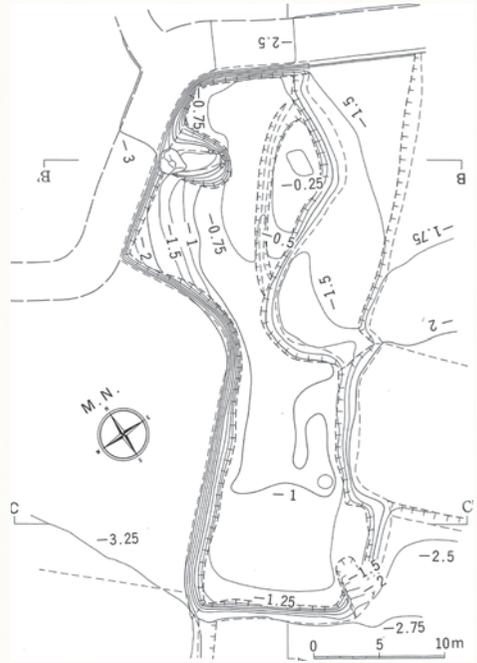
猫石丸山古墳は墳長約65mの前方後円墳で、前方部は近現代の土取りによって改変を受けています。墳丘に沿って周濠が廻っており、葺石は認められません。1996年（平成8）年度に行われた調査では周濠の底をはじめ、墳頂、墳丘斜面など至るところから多くの埴輪が発見されました。築造当時、古墳の周りに円筒埴輪を立て並べていたことが推定されます。なお、円筒埴輪の中には基底部長い「嘉穂型」（福岡県遠賀川流域）の特徴が認められるため、外来工人による技術の伝播が指摘されています。墳丘規格や埴輪の特徴などから古墳の築造時期は古墳時代後期前半（6世紀前半）と考えられます。

の うち 野内古墳

・文化財指定
[未指定]

・位置情報
【33°35'50.4"N 131°27'33.9"E】

野内古墳は赤坂川右岸の段丘先端部に立地する墳長44mの前方後円墳です。近現代にかけての削平によって大きく改変を受けていますが、本来は50m以上の規模であったとみられます。後円部に板状の石を積み上げた横穴式石室が露出していますが、現在は確認困難です。江戸時代の発掘で轡くつわや太刀たちなどが出土したと伝わりますが、現存していません。円筒埴輪・朝顔形埴輪が採集されており、埴輪の特徴などから猫石丸山古墳にさかのぼる古墳時代後期初め頃（6世紀前半）に築造されたものと考えられます。



野内古墳墳丘測量図

大分県教育委員会(1998)『大分の前方向後円墳』より

みさき おさき 岬古墳(尾崎古墳)

・文化財指定
[市史跡]

・位置情報
【33°40'24.0"N 131°30'28.3"E】

別名を「尾崎古墳」ともいう、周防灘を見下ろす海に突出した岬に位置し、現在は香々地青少年の家の敷地内に所在しています。古墳時代中期（5世紀）に造られた竪穴式石室をもつ円墳であったと言われています。遺物は横よこ板は革ぎ綴いた短かわ甲とじたんこう、鹿角ろっかく製装具を備えた鉄剣や鉄鏃などの武具類、鉄鎌・鋤先といった農耕具が出土しています。特に短甲は、ヤマト政権からの分配品であることが示し唆さされています。これらは古墳時代中期の副葬品の特徴をよく示す資料として、大分県指定有形文化財に指定されています。



岬古墳出土遺物(大分県指定有形文化財)

[画像提供:大分県立歴史博物館]

雷鬼の岩屋古墳

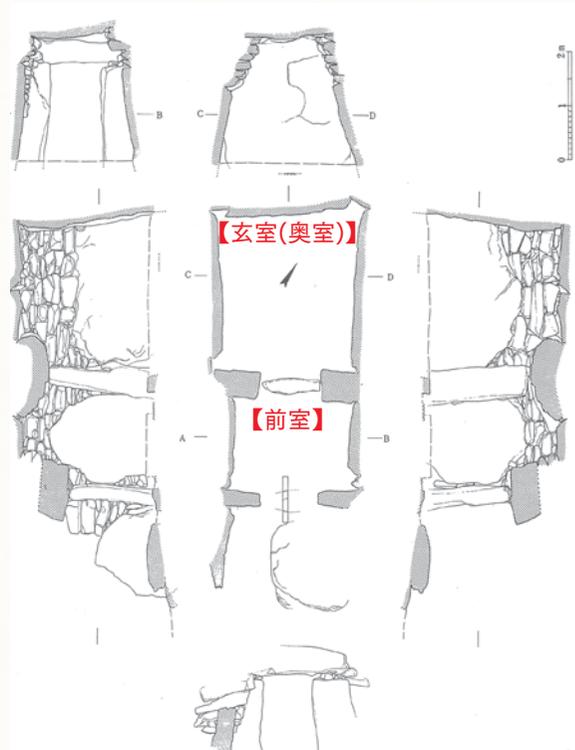
・文化財指定
[市史跡]・位置情報
【33°33'30.4"N 131°28'15.5"E】

雷地区から^{はらいだ}払田地区にかけての丘陵上には横穴式石室を持つ古墳が点在する中、雷鬼の岩屋古墳は市域に現存する最大規模の複室構造の横穴式石室を持つ古墳です。石室は羨道部の一部が消失していますが、内部そのものは良好に残っています。石室の全長は7.3m、玄室（奥室）の奥行2.8m、幅2.4m、天井高2.4mです。玄室奥壁には巨大な一枚岩を約6度内傾して立て、側壁は前・玄室ともに巨大な一枚岩の腰石の上に、やや持送りながら扁平気味の割石や川原石を比較的乱雑に積んで天井石を架けています。出土遺物は不明な点が多いですが、古墳時代後期（6世紀後半）に築かれたこの地域の有力者クラスの墓とされます。

なお、開口した石室を見た人々が「鬼が棲む」と噂したことから「鬼の岩屋古墳」と呼ばれています。

■複室構造とは？

玄室の中央部分に「^{そでいし}袖石」が配置されて2部屋に区切ったもの。奥を「奥室（後室とも）」、手前を「前室」と呼んで区別します。5世紀後半の菊池川流域（熊本県）を起源とし、主に九州地方でよく見られる横穴式石室の構造です。



鬼の岩屋古墳石室 実測図
豊後高田市(1998)『豊後高田市史 通史編』より



雷鬼の岩屋古墳 石室入口現況
羨道部は露出しており、東側腰壁石が内側に倒れている。

佐野古墳

・文化財指定
[市史跡]

・位置情報
【33°32'06.8"N 131°28'02.7"E】

佐野古墳は豊後高田市佐野の河内公民館前に所在します。墳丘を失っているため古墳の形や大きさは分かりません。残された横穴式石室をみると、崩れた天井石と思しき巨石が入口を塞いでいますが、玄室の奥壁ならびに側壁は幅約2mの巨大な板状の石で組み立てられており、石室全長は約3.8mあると思われます。規模も比較的大きく、類似した石室構造として宇佐市の凶首塚古墳が指摘されています。古墳時代後期（6世紀末～7世紀初め）頃の築造と考えられます。



佐野古墳石室 現況

奥壁や側壁は巨大な板石で構築されており、間近で見ると迫力がある。

西田古墳

・文化財指定
[未指定]

・位置情報
【33°32'13.0"N 131°27'55.4"E】

西田古墳は1997年（平成9）年度の圃場整備事業で確認・調査され、現在は河内中学校の敷地内に移設されています。封土はまったく失われていましたが、複室構造の横穴式石室で、周濠を巡らせた一辺約10mの方墳であったことが確認されました。石室からは鉄鏃や須恵器の破片が出土しており、遺物の検討から古墳の築造時期は古墳時代後期（6世紀末）と推定されています。また、濠から出土した土器は7世紀後半のものであったことから、「追葬」が行われた可能性が考えられます。



西田古墳石室 現況

石室の天井と壁の大部分は失われている。床部分には規則的に板石が敷かれていた。

あな せ よこ あな ぐん
穴瀬横穴群

・文化財指定
[県史跡]

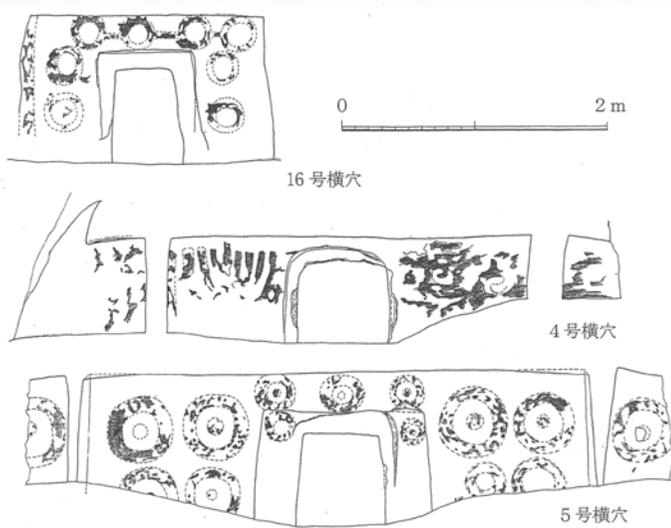
・位置情報
【33°33'24.5"N 131°28'18.3"E】

かつら とごう
桂川と都甲川の合流付近に
あたる上野部^{かみのうべ}から穴瀬にかけての約2kmの丘陵崖面には多数の横穴墓群が分布しています。穴瀬横穴群^{ぎょうかいがん}は凝灰岩の崖面に掘り込んだ横穴墓で、19基からなっています。この内、12基に装飾文様が施されていますが、長年による風化^{たいしよく}や褪色で確認することが難しくなっています。



穴瀬横穴群 現況

横穴の規模は、大きなもので奥行き2.2m、最大幅2.6m、天井高1.45mの横穴がある一方で、奥行き1m、横幅1.8mの小さく粗雑な造りのものも混在しています。大きさや入口（羨門）の造作には多少の違いが認められますが、入口部分を二段ないしは四段に削り込んだ壮大な構造の横穴が多いのが特徴です。



穴瀬横穴群の入口装飾

豊後高田市(1998)『豊後高田市史 通史編』より

古墳時代後期に入ると、九州地方を中心に古墳の石室に彩色や線刻を施した「装飾古墳」が盛んに造られるようになります。穴瀬横穴群に施された装飾は、玄室内部^きや入口全体を赤色で塗ったものや、整形した入口部に円文や同心円文といった幾何学^{かかく}文様を赤色で描いたものも見受けられます。これらの文様が描かれた意味につ

いては、詳しいことは分かっていません。鏡や太陽などの神秘的な存在を表している、幾何学的な文様の呪力じゅりょくによって墓を守っている、または死後の世界を表現して死者の安らかな祈りを願うものなど諸説あります。「赤色」は古代から魔除けや再生の色と考えられていたことは確かで、ベンガラ（弁柄とも。酸化鉄を原料とする赤色顔料）は装飾古墳の彩色に好んで用いられました。



16号横穴の羨門部に残された装飾文様 現況

古墳時代後期になると、古墳の被葬者は各地の首長層から下位の階層にも広がりました。古墳は小型化し、群集して造られることが多くなりました。このような時代に登場した新たな埋葬施設が横穴墓でした。従来の人工の墳丘を伴った古墳に比べて低コストであり、開閉可能な入口の構造によって追葬が出来ることも大きな特徴です。よって、横穴墓は集団の家族墓や一族の墓として各地で盛んに造られました。穴瀬横穴群も同様であり、装飾文様の分析から6世紀後半から7世紀中頃に造られたと考えられ、当時の有力農民（中流家族）の墓であったとみられています。

■市内に所在するその他の横穴墓

豊後高田市田染地区にも横穴墓がいくつか確認されています。

●ふたた両田横穴群／文化財指定〔市史跡〕

田染相原に所在。両田薬師堂北の崖面、約30mの間に11の穴うがが穿たれていますが、後年の改変や削平によって本来の形状を留めているのは3基に過ぎません。古墳時代後期に造られたと思われます。

●なかばやし中林横穴群／文化財指定〔市史跡〕

田染池部の山中深くに所在します。1972年（昭和47）に地元住民によって発見され知られることになりました。8基からなり、すべて開口していますが、構造は比較的良好に残っているようです。古墳時代後期に造られたと思われます。

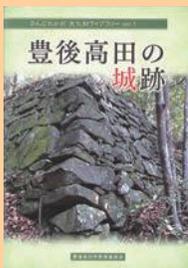


中林横穴群

■古墳見学の注意事項

- 古墳は貴重な文化財ですから、大切にしましょう。墳丘や石室は崩れる可能性があります。内部に入る際は細心の注意を払いましょう。
 - 古墳の大部分は私有地となっており、十分な整備がされていない所も多いです。見学に際しては、立入に十分注意して、マナーを守って行動しましょう。
 - 古墳の中には山中に所在するものもあります。ヘビやダニ、イノシシなど、害のある動植物などに気を付けましょう。また、山歩きの際は動きやすい靴・服装で出かけ、地図やGPSなどの準備もしておきましょう。
- ※本冊子では、各古墳の【位置情報】を表記しています。場所検索の参考・目安にご利用ください。但し、必ずしも古墳本体の正確な位置を示すものではありません。

■「ぶんどたかだ文化財ライブラリー」シリーズ バックナンバー



- Vol.1『豊後高田の城跡』 平成31年3月31日発行
高田城跡、屋山城跡など市内の代表的な城郭7つを紹介しています。
- Vol.2『豊後高田の磨崖仏』 令和2年2月12日発行
熊野磨崖仏や福真磨崖仏など市内12ヶ所の磨崖仏を紹介しています。

※バックナンバーは豊後高田市ホームページ内でデータ公開中!

詳しくは



【参考文献】 岩野勝 (1980)『私の郷土探訪』／大分県教育委員会 (2007)『おおいたの歴史と文化 今に生きる郷土の歴史』／大分県教育委員会 (1998)『大分の前方後円墳 三重・西国東地区編』／大分県立埋蔵文化財センター (2017)『遺物が語る大分の歴史』／大分県立歴史博物館 (2020)『おおいた歴博No.64 いにしえのおおいた』／小林達雄監修 (1999)『文化財探訪クラブ 2 考古学の世界』山川出版社／清水宗昭 (2011)「国東半島における首長墳の変遷」『古文化談叢』第65集 九州古文化研究会／下村精一・服部真和 (1999)「真玉大塚古墳出土の淡輪系埴輪について」『おおいた考古』第12集 大分県考古学会／第45回九州古墳時代研究会実行委員会 (2019)『国東半島の古墳 見学資料集』／豊後高田市 (1998)『豊後高田市史 通史編』／豊後高田市 (2013)『豊後高田市の文化財』／真玉町教育委員会 (1998)『真玉地区遺跡群発掘調査概報 (5) 大塚古墳』／真玉町誌刊行会 (1978)『真玉町誌』／松木武彦編著 (2019)『考古学から学ぶ古墳入門』講談社

ぶんどたかだ 文化財ライブラリー vol.3

『豊後高田の古墳』

発行：豊後高田市教育委員会文化財室
〒872-1101 豊後高田市中真玉2144番地12
TEL：0978-53-5112 / FAX：0978-53-4731
E-mail：bunkazai@city.bungotakada.lg.jp
発行日：令和2年12月16日発行
印刷：有限会社 宗印刷所
表紙：雷鬼の岩屋古墳石室